

1881年のボグロム分析 (2)

黒 川 知 文

II. ヘルソン県のボグロム

ヘルソン県はクリミア半島の北西に広がり、ドニエプル川以西に位置する。県都はヘルソン市。黒海北岸の低地を占め、気候は乾燥した大陸性気候で冬は暖い。この県において、最初のボグロムが発生した。すなわち、4月15日にエリサヴェトグラード市においてボグロムは発生し、その後49箇所において1ヶ月にわたって発生した。それらは、市、小市、村などを発生地としている。

ヘルソン県のボグロムは、第一にボグロムの原因を考える上で、発火点であることから研究する必要がある。第二に、都市におけるボグロムと村落におけるボグロムとを比較分析する上でも研究する必要がある。そこで、『史料集』の中で特にヘルソン県のボグロムを選び、分析することにする⁽¹⁾。クタイソフ伯による『史料集』は、彼が実際にボグロム発生後にヘルソン県を訪れ、集めたものである。具体的には、地方政府諸機関の公的調査書、関係者ならびに地元住民との会見記録などをその内容としている。これらの史料によって、以下の4点からボグロムそのものを分析したいと思う。第一にボグロム発生直前の状況、第二に発生状況、第三に民衆の行動、第四に警察の対応である。

1. 発生直前の状況

発生直前の状況については、エリサヴェトグラード市、アナニエフ市、ベレソフカ小市の『史料集』に記録されている。以下、順に見ていくことにする。

(1) エリサヴェトグラード市

「復活祭の3週間ほど前に、エリサヴェトグラード郡とアレクサンドル郡などにおいて、ユダヤ人に対する虐殺がまもなく起きるといふ噂が人々の間に広

まった。——これらの噂によって新ロシア通信社 (Новороссійскій Телеграфъ) の人々は、その危険性について報道すべき必要を感じた。彼らは定期刊行物に噂に関することを掲載した。また、地方当局者は、復活祭に生じるかも知れないこの暴動を未然に防ぐために、必要な手段を取った。すなわち、3月31日にはエリサヴェトグラード郡警察が、4月5日にはアレクサンドル郡警察が、各地方警察署長に来るべき暴動に対して予防手段を取ることを命令した。4月10日には、ヘルソン県知事が、全ての郡警察、市警察署長に電報を發した。それは、軍隊の協力によって暴動の予防と秩序を維持せよとの警告であった⁽²⁾。」

この警告により、市警察署長ボルガノヴィチは、第七騎兵師団皇帝随員陸軍少将コシーチの協力を得て、30人の歩兵下士官を警察署に補充し、20人の騎兵を夜警の任に着かせた。また軽騎兵ベロルシヤ連隊が、市の中心部に配備され、暴動が生じると警察署に急使を送ることになっていた。さらに、ユダヤ人の経営する居酒屋は、復活祭の週の3日間（4月12日から14日まで）店を閉じるように命令された。

軍隊の協力と、ユダヤ人経営の居酒屋が閉じられたことにより、復活祭の4日間、4月15日まで市内は平穏であった。そのためボルガノヴィチは軍隊の配備を解き、県知事に異状ないことを電報で報告した。この2時間後に、ボグロムは発生する⁽³⁾。

(2) アナニエフ市

ユダヤ人虐殺に関する噂は、復活祭の始まる以前に広がっていた。県知事の電報を受けた夜、夜警が強化された。さらに、復活祭の初日の4月12日から地方下士卒による巡視が行なわれた。市長バルヂェスクルは「馬に乗って郊外に出向き、『ユダヤ人を虐殺してもよいという噂を信じてはいけない』ことを民衆に説き聞かせた⁽⁴⁾。」その後80人の「危険思想を持たない市民⁽⁵⁾」を選び、必要に応じて警察に協力することを約束させた。

ここにおいては、警察と軍隊による巡視の強化、市長の説得、市民の協力要請などの予防手段が取られている。

(3) ベレソフル小市

暴動の2, 3日前に、同様の噂が流れていた。また4月27日が日曜日で市場が開かれることになっており、これには多くの人々が集まるので、ユダヤ人に対する暴動の可能性があった。そのため警察署長ポイツェホフスキーは、隣村の巡査、農民から選ばれた巡査、さらに100人の「危険思想を持たない農民」とを集めた。これらの人々は、26日の朝、当地に到着し、宿舎に集まり警察署長から召喚の目的と、治安維持の手段とが説明された。各巡査には、25人ずつの農民が配属された。この農民は他と区別するために「警察命令による」(В распоряжении полиции) という名札が着けられた⁽⁶⁾。

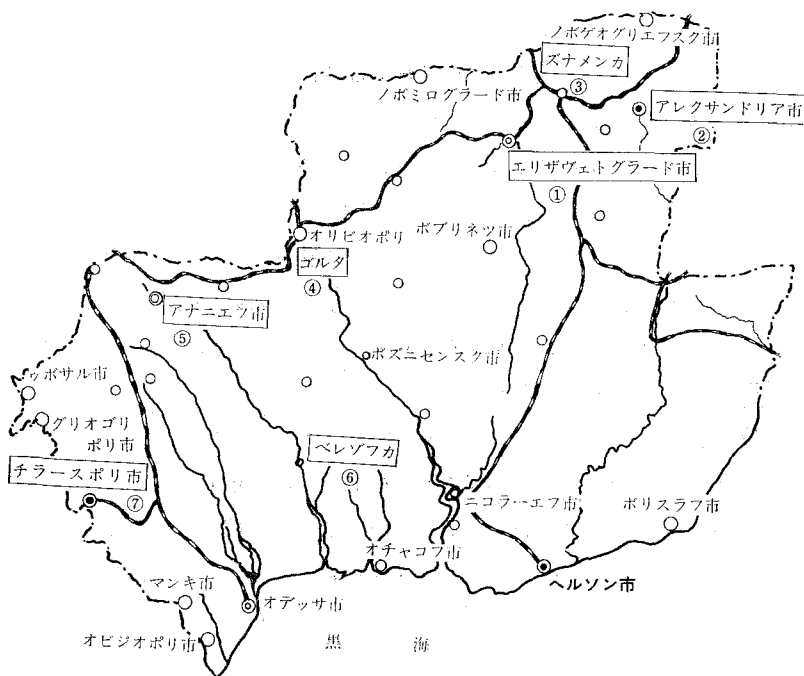
これら3箇所における発生直前の状況には共通点がある。第一に、「ユダヤ人を虐殺してもよい。」「ユダヤ人虐殺が起きる。」という噂が広まっていること、第二に、県知事から「暴動を予防せよ」との電報を受けたこと、第三に、それに従って地元の警察署長が暴動予防手段を取っていること、などである。特にそれは、軍隊や市民、農民の協力を得た予防手段であり、復活祭の週や市場の日など、暴動発生のある日を警戒している。発生直前において、十分に予防手段が取られたにもかかわらず、ボグロムは発生した。どのようにして発生したのであろうか。

2. 発生状況

第5図はヘルソン県におけるボグロムの発生状況を示す。エリサヴェトグラード市で始まったボグロムは、翌日にアレクサンドル郡、1日後にはズナメンカ鉄道駅とゴルタ村、10日後にアナニエフ市とベレゾフカ小市、1月後にチラースポリ郡、その一週間後にオデッサ郡へと広がった。発生日と発生箇所数を示すと以下ようになる⁽⁷⁾。

- 4月15日 1箇所
- 4月16日 4箇所
- 4月17日 13箇所
- 4月18日 8箇所
- 4月19日 4箇所
- 4月20日 2箇所
- 4月21日 4箇所

4月26日 2箇所
 4月27日 6箇所
 4月28日 3箇所
 5月4日 1箇所
 5月6日 1箇所
 5月10日 1箇所

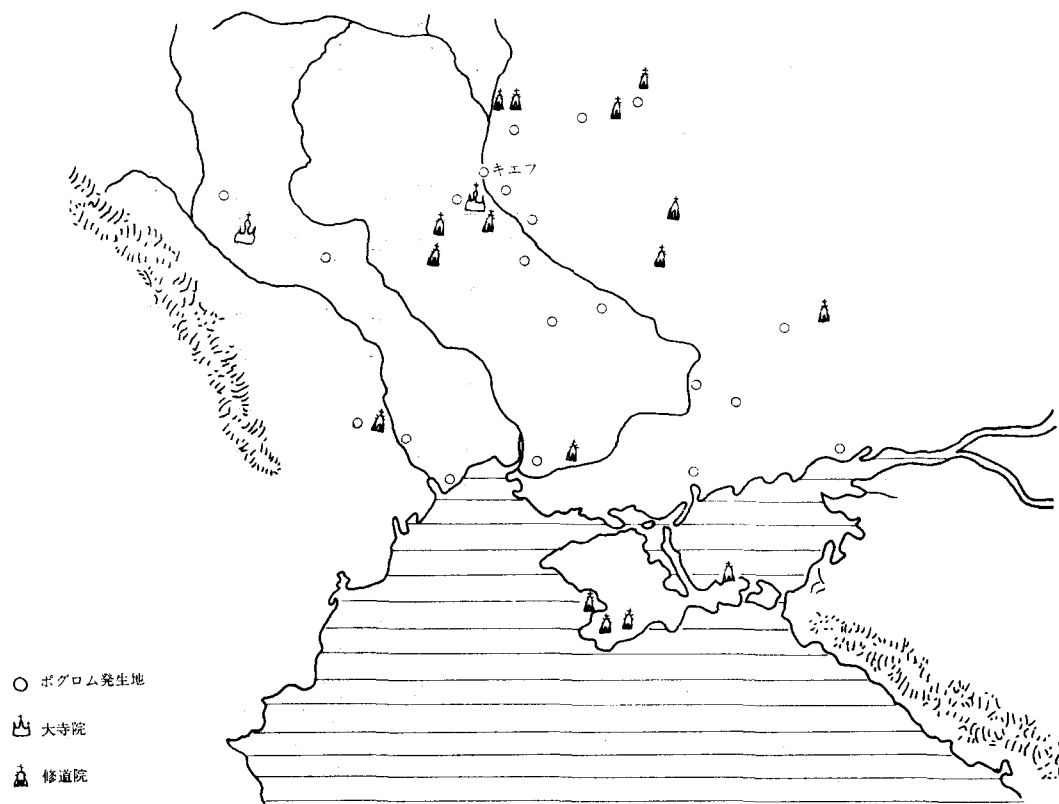


第5図 ヘルソン県におけるボグロム発生状況

4月17日, 18日が最も多く発生しており, 発生箇所は鉄道沿いに, しかも北からしだいに南へ移っていることがわかる。発生順に主要な発生箇所の状況を見ることにする。

(1) エリサヴェトグラード市

「警察署長が県知事に電報を打った2時間後, 第二警護区の署長は, ユダヤ



第6図 ボグロム発生地とロシア正教会勢力地との関係

人グリチェフスキーの居酒屋で、市民が集まり喧嘩が起きたことを知らされた。現場に行くと、居酒屋の近くの通りに、労働者から成る民衆が集まっており、市民の一人イワン・レドレンコが、『ユダヤ人に殴られた』と言明した。署長は群集に解散を命じたが、すでに強い興奮状態にあった群集は、それに従わず、通りからさらに人々が集まってきた。『ユダヤ人が、おれたちを殴りに来るぞ』彼らは口々に叫びだした。そして数分後に群集は、通りにあるユダヤ商店のガラスを割り、ユダヤ人を追い始めた⁽⁸⁾。

群集による一種のパニック状態といえる。市の郊外においては、主に夜中に暴動は発生した。15日の午後11時頃、馬市場の近くのユダヤ人レイバ・レズニコフの家が破壊された。また夜半過ぎには、バルク小市、クレエフカ小市、コワレフカ小市、ブイカボイ小市の居酒屋と下級食堂で暴動が発生した。

翌16日午前7時に、市民は再び市の郊外に集まり始め、近村の農民もこれに加わり数を増した。彼らは徹夜で警備していた軽騎兵師団の疲労をついて、ユダヤ商人イブカ・ブロンベルグの家を破壊し始めた⁽⁹⁾。

(2) アレクサンドル郡

エリサヴェトグラード市から10キロ程離れたプソコブエラクスキー郷の4村で発生した。これらの村の農民は「エリサヴェトグラード市の暴動とその参加者が罰せられなかったことを聞き知り『ユダヤ人を打ち、彼らの家財を破壊せよ』との政府命令が出たことを確信した⁽¹⁰⁾。」そして16日の夜、マロイ・ママイク村で農民が居酒屋を破壊し始めた。19日には、アレクサンドリア市において、広場に集まった300人あまりの群集が「残忍なユダヤ人、強欲なユダヤ人め」と叫びながら、ユダヤ人家屋や商店に石を投げつけた。

(3) ズナメンカ小市

鉄道駅において17日朝5時から昼まで暴動が発生したが、その状況に関する詳しい記録は『史料集』にはない⁽¹¹⁾。

(4) ゴルタ村

17日午後8時、警察署長の不在時に、駅のまわりに集まった約40人の群集は、ユダヤ人家屋に向かって叫び声をあげ、窓ガラスを壊し始めた⁽¹²⁾。

(5) アナニエフ市

25日に暴動の前兆が見られる。「数名の少年が、ユダヤ商店へ行き、菓子、タバコなどを取り払わずに走り去った。」

20日午後4時、市の教会広場に民衆が集まり「ウラー」と叫び声をあげ、ユダヤ人めがけて突進し始めた。アナニエフ市民イグナチ・レシェンコは、群集に行動開始を命令した。興奮した群集は、「ユダヤ人が皇帝を殺した。」「ユダヤ人虐殺命令はすでに出されたが、市長はそれを隠している。」などと叫びながら破壊活動を始めた⁽¹³⁾。

(6) ベレゾフカ小市

26日の午後3時までは平穏であったが、4時になると、キリスト教徒とユダヤ穀物商人との間に争いが市場で生じた。数分後に群集は、「叫び声をたて口笛を吹きながら、村のユダヤ商店へ押しよせ、付近のユダヤ人家屋も共に破壊し始めた。『ユダヤ人を殺せ、皇帝殺しのユダヤ人を』と群集は叫び、暴動を止めようとする巡査に向かって『ユダヤ人を買収された警察は、ユダヤ人を殺す命令書を隠している』と怒声をたてた⁽¹⁴⁾。」

(7) チラースポリ郡

ベレゾフカ小市に近いベルナルドフカ村とジェミドボム村において、目撃者によれば、27日の夜、日曜日の市場をきっかけに発生している⁽¹⁵⁾。詳しい記録は『史料集』には無い。

(8) オデッサ郡

発生状況はチラースポリ郡と同様であった。5月4日にシュバイエル村とミハイロフカ村において、16人の雑役人夫がユダヤ商店を襲撃した。時刻は不明である⁽¹⁶⁾。

以上8箇所におけるボグロム発生状況には4つの共通点がある。それは以下の通りである。

第一に、暴動のきっかけは、居酒屋での喧嘩、ユダヤ商人との争いなど、いずれも小さなことにすぎない。しかしそれをきっかけに民衆が集まり暴動へと発展している。第二に、暴動が発生した場所は、都市においては居酒屋、広場など、小市・村においては、居酒屋、市場、下級食堂などであった。第三に、暴動が発生した時刻は、都市においては昼間が多いが、村においては夜間ある

いは早朝が多い。第四に、民衆はユダヤ人虐殺の政府命令を信じていた。これは彼らの叫び声からわかる。このことはエリサヴェトグラード市の暴動参加者があまり罰せられなかったことによってなおさら強く民衆によって確信された。

次に、民衆の行動を分析する。

3. 民衆の行動

詳しい記録のあるエリサヴェトグラード市における民衆の行動を見ることにする。

「ユダヤ人を追う群集は、第17区の市場へと向かった。そこで商店を破壊し、商品を通りに投げ捨てた。一軽騎兵第2分隊が来て群集に解散を命じたが、効果はなかった。郊外の馬市場付近でも群集はユダヤ人家屋のあらゆる家庭用品を投げ捨てた。軽騎兵の到着と共に、彼らは夜の闇にまぎれて近くの公園や峡谷に逃亡した。しかし、軽騎兵が去ると、彼らは再び集まり、3軒の娯家を破壊した。夜半過ぎに、郊外のバルク小市などにおいて、群集は主に居酒屋と下級食堂を襲撃した。朝になると彼らは自分の家へ帰った⁽¹⁷⁾。」

16日午前7時に群集は、「再びユダヤ商人イブカ・ブロンベルグの家屋において、ドアと窓ガラスを破壊し、家財を通りに投げ捨てた。さらに隣りのユダヤ商人バルダフの家、また居酒屋、下級食堂などが破壊された。村から参加した農民も多く、勢力を増した群集は2つの集団を形成した。第一の集団は、ウスペンスキー通りのコーガンとモシュカ・レズニコフの家へ向かった。そこで破壊活動をした後に軍隊によって散らされた。第二の集団は、市場付近において居酒屋、酒貯蔵庫、ユダヤ人家屋などを破壊した。その後、興奮した群集は、小売店を襲撃し、商品を通りに投げ捨てた⁽¹⁸⁾。」

以上の民衆の行動から以下のことが指摘できる。第一に、民衆はユダヤ人の家屋、商店さらに居酒屋、下級食堂、酒貯蔵庫などを破壊している。それも窓ガラス、ドア、家財、家庭用品などを破壊し投げ捨てている。第二に、彼らの行動は破壊に目的があり、掠奪はあまり見られない。掠奪したのは破壊後に来た人々であった。それは以下の記録でわかる。「破壊者の後に、主に農婦・青年・子供から成る『裸足の軍隊』(босоногие команды)と呼ばれる者たちがや

って来た。彼らは家屋や商店から投げ捨てられた家庭用品や商品を集めた。また警察によって保管されていたユダヤ人の家財なども、混乱を利用して荷馬車もろともに持ち去った⁽¹⁹⁾。」さらに、民衆がユダヤ人の家財の破壊に専念したことは、以下の極端な例からもわかる。「警察に届けられたユダヤ人の物品を追いかけて、30人から成る農民は、役所に現われ、そこに集められたユダヤ人の商品、家財を徹底的に破壊した⁽²⁰⁾。」

群集の破壊活動はすべてのユダヤ人に対してなされたのであろうか。これについて以下の記録が参考になる。「ロシア人が住むユダヤ家庭は破壊を受けなかった。さらに、ロシア人労働者に誠実で評判のあるユダヤ人の家屋のいくつかは無事に残った。」民衆による日常のユダヤ人に対する感情が暴動に反映したといえる。

暴動の指導者あるいは扇動者の存在について次に見ていくことにする。アレクサンドル郡のマリエフク村においては、フィソコブエラクスキー郷長のセバスチャン・レシェンコと、村長のイーゴリ・ファブリカとが農民たちを扇動した。その為に農民たちは、ユダヤ人を襲撃せよとの郷長命令が出ていることを信じて⁽²¹⁾、居酒屋に向かった。さらにイーゴリ・ファブリカは農民と共に居酒屋へ行き、「大声で、『酒を飲め、ユダヤ人をやっつけろ。責任は全て私が取る』と叫んで⁽²²⁾」彼らを鼓舞した。彼ら2人は扇動者として、18日の朝に逮捕され、アレクサンドリア市警察署に連行された。同様な例は、エリサヴェトグラード郡のグルスキー村に見られる。村長ロシェノフは、「居酒屋を破壊しようとしている群集に対して、『やりたいことをやれ』と言い⁽²³⁾、」自分は村から逃亡している。彼も後に逮捕された。

これらは、郷長・村長によるものであったが、民衆の指導者の存在はアナニエフ市のみに見られる。4月26日午後4時に、市の教会広場に集まった民衆に攻撃命令を下した市民イグナチ・レシェンコは、「逮捕され下士卒と警察署長コベルスキーに護送されて警察に向かった。しかしその途中、彼の同調者たちが力づくで彼を奪い返した。」レシェンコはその後も、「群集の先頭に立ち、イワンツキー居酒屋に現われた。そこに下士卒が到着し、彼は再び逮捕されたが、群集のあまりもの乱暴的行為によって、郡警察は彼を釈放し、帰宅するよ

うに命じた。」釈放されたレシェンコは、「自宅へ帰り、彼の同調者たちも彼に従った。レシェンコが市の中心地から去った後、通りに集まっていた人々はしだいに暗くなったので家に帰った⁽²⁴⁾。」これらからわかるように、レシェンコは、確かに群集に攻撃命令を下したが、指導力はそれほど無く、一市民にすぎなかったと考えられる。

以上に見られるように、ボグロムにおいて扇動者はごく少なく、しかもあまり指導力を持っていたのはいなかった。ほとんどのボグロムは指導者も無く、計画も無く、群集そのものが感情的に破壊活動をしたと言える。

さて、アナニエフ市において、群集は力づくでレシェンコを警察から奪い返したが、一般的に警察と軍隊に対して群集はどのような態度を取ったのであろうか。初期の段階においては、彼らは警察命令を無視している。そしてある場合には、警察や仲裁に入った村長に対して罵声を浴びせている。例えば、4月19日、アレクサンドリア市において、「群集の何人かは、軍隊に反抗して兵士に石を投げつけ、『ユダヤ人の雇われ者め』と悪名呼ばわりした⁽²⁵⁾」とある。4月26日、ベレゾフカ小市においては、暴動が始まると、「警察に協力するように命令されていた農民は、名札をもぎ取り群集に加わった。その為に群集の数は、ますます増加した⁽²⁶⁾。」また、27日、チラースポリ郡ベルナルドフカ村においては、「暴動発生時に村長は群集に解散するように命じたが、群集は、『もしユダヤ人の味方をする、お前もなぐるぞ⁽²⁷⁾。』とおどした⁽²⁸⁾。」とある。

しかし初期においてこのように反抗した群集も、暴動を制止する為に軍隊が到着すると、逃亡するか逮捕されている。4月16日にオリピオポリ槍騎兵連隊、17日にザモスツキー歩兵連隊がエリサヴェトグラード市に到着すると、暴動は完全に終止した⁽²⁹⁾。アレクサンドル郡でも、警察署長シロフスキーの命令に従って、「農民たちは集められ、ユダヤ人家屋で掠奪した物を捨て始めた。壊れた家具、破れたふとんと枕、空のウォッカ以外の全ての掠奪物はこうして集められ、ユダヤ人に戻された⁽³⁰⁾。」ズナメンカ小市近くのスポトツェフ村、ポクロフスク村においては、村長の命令によって暴動は制止された⁽³¹⁾。さらに、アナニエフ市においては、暴動が発生して2日目の夜10時に「事態収拾の為に12人の下士卒と、62人の軍隊がやって来るという噂が広まった。そのため

ザモスツキー歩兵連隊が、28日早朝に市に到着すると、すでに暴動は止んでいた⁽³²⁾。」

以上、民衆の行動からわかることは、以下の四点である。

第一に、民衆はユダヤ人の家屋、商店や家財などの破壊活動に集中しており、その後掠奪する集団が見られた。第二に、この破壊活動は、ユダヤ人に限ってなされたが、ロシア人の住むユダヤ家庭、評判の高いユダヤ人の家は破壊されなかった。第三に、扇動者は若干見られるが、それもあまり指導力を有していなかった。ほとんどの場合、民衆が無計画に、感情的に暴動を起こしている。第四に、初期には民衆は警察に反抗しているが、軍隊が到着すると、その命令に従った。

次に、ポグロムを制止する警察側の行動を分析する。

4. 警察の対応

アナニエフ郡ゴルタ村は、ブゴム川をはさんで、オリビオポリ市の対岸に位置する。人口は約3,000人でうちユダヤ人は約800人である。ユダヤ人は鉄道駅オリビオポリの近くに集落を形成していた。『史料集』には、ゴルタ村の警察署長の行動が詳しく記録されているので、それを見ることにする。

4月17日午後8時、オリビオポリ駅に集まった約40人の民衆は、ユダヤ人集落に襲撃を加えた。この時、オリビオポリ市警察署長リフタンスキーは、「ブゴム川の向こうのゴルタ村から警鐘と異様な叫び声とを聞きつけ、13人の下士卒と共に船に乗りゴルタ村へ向かった。ゴルタ村警吏から、200人余りの群衆が、ユダヤ人家屋を破壊しているのを聞き知り、リフタンスキーは急いでオリビオポリ市に戻った。市において市長ミハイルの指示によって、約70人の市民が集められゴルタ村の暴動収拾に向かった。アナニエフ郡警察署長も同じ頃にゴルタ村に到着し、その後到着したアナニエフ市警察署長ナジェージンと共に事態収拾に専念した。彼らの協力によって、暴動は朝3時におさまり、13人が逮捕された⁽³³⁾。」

警察は一貫して暴動収拾の為に努力していることがわかる。ゴルタ村の場合は、市と郡の警察の協力によって暴動は収拾したが、軍隊の協力を得た箇所もあった。それらを調べると以下のようなになる。なお人数については判明してい

ない箇所もある。

- (1) エリサヴェトグラード市
オリビオポリ槍騎兵連隊
ザモスツキー歩兵連隊
軽騎兵ペロルシヤ連隊
第七騎兵師団の騎兵下士卒20人
同師団の騎兵幼年学校兵士
- (2) アレクサンドル郡
軍隊の協力なし
- (3) ズナメンカ小市
オリビオポリ槍騎兵部隊
第一三騎砲兵中隊18人
地方連隊と第二西部騎砲兵中隊計200人
- (4) ゴルタ村
軍隊の協力なし
- (5) アナニエフ市
ザモスツキー部隊62人
- (6) ベレゾフカ小市
コサック騎兵中隊100人
- (7) チラースポリ郡
軍隊の協力なし
- (8) オデッサ郡
軍隊の協力なし

これらからわかることは、都市においては軍隊の協力を要しているが、郡部においては要していないということである。郡部においては、他の地方の警察の協力を得るか、地元民の協力によって事態を收拾している⁽³⁴⁾。

以上、ボグロム時における警察の行動からわかることは、第一に、警察は、ボグロム発生直前から一貫して收拾策を取っていること、第二に、その收拾策は都市においては軍隊の協力を積極的に得ることによって、また郡部において

は他の地方警察の協力によってなされたこと、などである。

5. 結 論

ヘルソン県におけるポグロムのこれまでの分析をまとめると、以下のようなになる。

- 1) 発生直前において、ユダヤ人虐殺命令が政府から出たとの噂が広まったこと、それによって「暴動を予防せよ」との県知事の電報が打たれ、警察は予防策を取っている。
- 2) 小さな争いをきっかけにして、都市においては居酒屋、広場など、小市・村においては居酒屋、市場、下級食堂などで暴動が発生した。特に都市においては昼間、村においては夜間に暴動は起き、その際、民衆はユダヤ人虐殺の政府命令を信じていた。
- 3) 暴動時において、民衆は、ユダヤ人家屋、商店さらに居酒屋、下級食堂、酒貯蔵庫などを破壊しており、その後『裸足の軍隊』と呼ばれる集団が掠奪した。彼らの破壊活動はほとんどの場合ユダヤ人のみに限定しており、しかも特定の指導者を持たない、無計画な、感情的とさえ言えるものであった。さらに、初期においては警察に反抗したが、軍隊が到着すると命令に従った。
- 4) 警察は一貫して暴動収拾策を取っており、その際都市においては軍隊の協力を要請し、郡部においては、他の地方の警察の協力を要請した。

以上、ヘルソン県のポグロムを分析することによって、ポグロムがどのような暴動であったのかが理解できた。次に、この分析を元にして、ポグロムの性格について考察する。

(註)

- (1) Материалы, стр. 468-485 に、ヘルソン県に発生した各ポグロムの詳細な記録がある。それは以下の通りである。
エリサヴェトグラード市 стр.468-477.
アレクサンドル郡 стр.477-478.
ズナメンカ小市 стр.478-480.
ゴルタ村 стр.480-481.
アナニエフ市 стр.481-482.

ベレゾフカ小市 стр. 482-484.

チラースポリ郡 стр. 484-485.

オデッサ郡 стр. 485.

- (2) Там же, стр. 468.
- (3) Там же, стр. 469.
- (4) Там же, стр. 481.
- (5) ロシア語では человекъ благонадежных обывателей.
- (6) Материалы, стр. 482.
- (7) Там же, стр. 487.
- (8) Там же, стр. 469.
- (9) Там же, стр. 470.
- (10) Там же, стр. 477.
- (11) Там же, стр. 478-479.
- (12) Там же, стр. 480.
- (13) Там же, стр. 481.
- (14) Там же, стр. 482-483.
- (15) Там же, стр. 484.
- (16) Там же, стр. 485.
- (17) Там же, стр. 470.
- (18) Там же, стр. 471.
- (19) Там же, стр. 470.
- (20) Там же, стр. 470.
- (21) Там же, стр. 471.
- (22) Там же, стр. 478.
- (23) Там же, стр. 478.
- (24) Там же, стр. 475.
- (25) Там же, стр. 481-482.
- (26) Там же, стр. 477.
- (27) Там же, стр. 483.
- (28) Там же, стр. 484.
- (29) Там же, стр. 471.
- (30) Там же, стр. 478.
- (31) Там же, стр. 479.
- (32) Там же, стр. 482.
- (33) Там же, стр. 480-481.
- (34) ベレゾフカ小市においては、軍隊とともに、近村のドイツ人農民の協力をも得ている。Там же, стр. 482 を参照。

III. ポグロムの性格

1881年のポグロムの性格については、主として二つの立場がある。ユダヤ人歴史家の何人かは、これを政府の計画によって引き起こされたものとする⁽¹⁾。一方同時代の他の歴史家は、全く自然発生的なものと性格づけている⁽²⁾。この問題については『史料集』に限界があるために、明確に判断は下せられない。そこで、さしあたって、これまでの分析結果によって、ポグロムの性格を考察したい。

1. 民衆の自発性

ポグロムが民衆の自発性によるものであることは、様々な観点から確かめられる。第一に、加害者がロシア農民と町人、それも下層労働者が多く、特に都市においては出稼ぎ労働者が過半数を占めていたこと、さらに被害者もユダヤ町人、商人などの下層民であり、両下層民の対立というものがポグロムの根底にあったといえる。

第二に、小さな争いをきっかけにして、都市においても村においても居酒屋、市場、下級食堂などの両下層民が日常接する場所においてポグロムは発生した。ユダヤ人に対して抱く日常的な敵意というものが、ポグロムにおいて反映したといえる。それは破壊活動はほとんどの場合ユダヤ人に限定されていること、例外としてロシア人にも評判の高いユダヤ人に対しては襲撃しなかったこと、などにも現われている。しかも、民衆は富裕ユダヤ人よりはむしろ同じ下層のユダヤ人を攻撃した。それも掠奪が目的ではなく、破壊することに彼らは集中した。これらから、ポグロムは、経済的利害によるユダヤ人ブルジョワジーに対するロシア人プロレタリアートの闘争ではなかったと考えられる。なぜならば、もしそのような闘争であるなら、ロシア人は富裕ユダヤ人を攻撃し、しかもその家財を掠奪することに集中したと考えられるからである。

ユダヤ人に対する日常的な敵意から生じる自発的な民衆のエネルギーは、ポグロム発生時においては、警察、軍隊の制止力を押し返すほど強いものであった。またそれは民衆感情によるものであるから、長く継続しなかった。そのために、ほとんどのポグロムは、1、2日経て終わり、また全体的趨勢も時とともに弱まる傾向にあった。民衆感情に根ざすこのエネルギーは、さらに別の角

度からとらえる時に、より深く理解できる。それは宗教的観点からである。

2. 宗教性

ロシア正教では12の大きな祝日がある。復活祭⁽³⁾は、これらすべてにまさる別格の大祭である。復活祭以前の1週間は受難週と呼ばれ、信仰深い農民たちは断食する。この週の金曜日には、キリストの苦難と死とを記念して埋葬の模倣儀式を行なう。翌土曜日の夜半少し前に、人々は教会に集まり十字行⁽⁴⁾を行なう。その後司祭がキリストの復活を告げ、人々は「キリスト甦り給えり。」と唱和する。復活祭後の1週間は、光明週間と呼ばれ、祝祭気分にあふれる。ボグロムはこの週に発生した。すなわち、敬虔なロシア正教徒である農民が1年のうちでも最も宗教的感情が高揚し、教会を中心に集まる時に、キリスト殺しのユダヤ人に対する暴動が発生したといえる。これは第一に、ボグロム発生地が都市よりも村が圧倒的に多かったことの説明となる。第6図は、ボグロム発生地とロシア正教会勢力地との関係を示す。これを見ると、ロシア正教の代表的な大寺院と修道院の位置とボグロム発生地とがほぼ重なることがわかる。すなわち南ウクライナがそもそもロシア正教の地域であるが、その中でも特に正教の伝統が強い地方にボグロムは発生したといえることができる。言い換えれば、宗教的伝統の強い村を中心にボグロムは発生したとなる。

ボグロムの宗教性は、第二に、逮捕者の中に、古儀式派、無司祭派などのロシア正教の急進的セクトが含まれていたことの説明となる。これらのセクトは17世紀中頃のニーコン宗教改革に反発して、非ロシア的要素を拒否するものであった⁽⁵⁾。17世紀後半には、政府の迫害を逃がれ、北海沿岸地方と南ウクライナに共同体を形成していた。特に南ウクライナには、司祭派だけでなく、とりわけ急進的な無司祭派も進出していた。このセクトは、ウクライナ農民、コサックなどにその信奉者を見出した⁽⁷⁾。非ロシア的要素を強く拒否する教儀のために、ボグロムにおいてこのセクトは積極的に活動したと考えられる。

さらに、農民の宗教性が生み出した皇帝崇拜も、ボグロムに反映している。神の支配を地上で行なう皇帝に対する崇拜は、ロシア農民に根強く存在していた。このために、アレクサンドルⅡ世暗殺事件後の「皇帝はユダヤ人によって殺された」という噂⁽⁸⁾、さらには、ボグロムの起爆剤ともなった「ユダヤ人を

虐殺せよとの政府命令が下った」という噂は、復活祭を迎えて宗教的感情の高揚した農民に宗教的反ユダヤ感情を呼び起こさざるをえなかった。ユダヤ人虐殺命令は、彼らにとってもはや疑いの余地のない事実となり、ポグロム発生時にあっては制止する軍隊、警察をユダヤ人に買収された者と決めつけるほど強い確信となって彼らに働いたと考えられる。

以上をまとめると、日常接するユダヤ人に対するロシア下層民の敵対感情、さらに宗教的感情に根ざしたロシア農民の反ユダヤ感情といったものが、ポグロムにおける民衆の主要なエネルギーであり、それが民衆の自発性と宗教性というポグロムの性格を形成したと考えられる。

(註)

- (1) この立場は以下の歴史家によってとられている。ドゥブノフ (Симон Дубнов), グリーンバーグ (Louis Greenberg), バロン (Salo W. Baron), エティンゲル (Shmuel Ettinger) など。いずれもユダヤ人の歴史家である。
- (2) В. Я. Яковлев-Богучарский, Из Истории Политической Борьбы, 1912, Москва, стр. 219
- (3) 元来ユダヤ教の過越の祭を意味するパサーハ (ロシア語および近代ギリシア語の発音。フランス語のパークも同語源) の名称で知られるこの祭は、移動祝日であって、毎年の日が一定しない。ニケーアの第1回公会議で「春分のつぎの満月に続く日曜日、もし春分の当日が満月にあたる時は、つぎの満月に続く日曜日」と決定した。したがって年によって1か月以上のずれが出るが、通常は4月に祝われる。
- (4) 司祭に従い十字架を持って教区を巡回すること。ヒングリー著、前掲書、188頁。
- (5) 彼らはニーコンによる改革の中で、十字を切る指が2本から3本になったこと、儀式中のハレルヤ唱和が2回から3回になったこと、主イエスの表記が「イウスス」から「イイスス」になったこと、などに特に反発した。
- (6) 1690年代には、オネガ湖と白海との間に、ヴィグ共同体なるものが形成されていた。
- (7) 特に下層階級への浸透が見られる。古儀式派に関しては以下を参照した。
Л. С. Смирновъ, Исторія Русскаго Раскола Стараобрядства, С-Петербургъ, 1895. Billington, James. H, The Icon and Axe: An Interpretative History of Russian Culture, New York, 1967
- (8) アレクサンドルⅡ世暗殺グループにはゲシヤ・ゲリフマン (Гесся Гельфман) というユダヤ人の女性がいた。しかし、彼女は革命主義者の住所録を保持してい

たということだけによって逮捕された。彼女には死刑の判決が下ったが、妊娠していたために刑の執行は延期された。出産後、結局獄死した。Simon Dubnow, *History of the Jews*, New York, 1973. Vol. V, p. 514 を参照。

課題

ところでポグロムのエネルギーとはどのようなものであったのか。これについては、ポグロムは第一に民衆の自発性によるものであるから、民衆の次元に視座を据え、経済的利害状況をまず調べる必要がある。それとともに第二の作業として民衆の宗教的感情に根ざした対立状況についても考察する必要がある。これら二面からの考察により、民衆のポグロムを起したエネルギーとポグロムの発生原因が解明できると考えられる。

(筆者の住所：香川県木田郡三木町池戸2704-8)